

大漁を願う

吉崎を歩く

匝瑳 探訪

—66—

吉崎区は市内の南東部に位置し、新川を境に旭市と隣接しています。数個の集落が点在していますが、それらは400年前ごろには成立していたと考えられます。そのころに星宮神社がまつられたと伝わりますが、古くは「妙見様」とよばれ、1300年代以降、この地域に進出してきた千葉氏の流れがまつったものでしょう。

江戸時代の1670年、樺湖の干拓事業に伴い現在の新川が掘られ、吉崎村や周辺10

余か村はさまざまな影響を受けました。湖水を九十九里浜に流す際、新川沿いの村々の田畑に樺湖の水や砂が流れ込み、「人や馬が流れること数知れず」という被害の有り様でした。

現在、区内には1415年に創建されたという龍性院と幸寿院の2か寺がありますが、江戸時代にはこれらを含め6か寺ありました。寺跡はいずれも墓地となっています。

神社は星宮神社がまつられています。石の鳥居をくぐり

星宮神社の石灯籠

参道を進むと、拝殿の前に2基の石灯籠が並んでいます。1基は1784年11月と翌年2月に石橋与右衛門が願主となり立てられました。これには「天

下泰平 海上安全 五穀成就
水主繁盛」と願いが刻まれています。他の1基は、1862年4月に宇野沢久兵衛が「海上安全 水主繁盛」を祈願して立てました。

市内の寺社には、多くの石灯籠がありますが、漁業に關した願い文が刻まれているのはこの2基だけです。「水主」とは水夫、船乗りのことで、ここでは漁民のことをいったのでしょう。石橋与右衛門と宇野沢久兵衛は、ともに同村の網主でしたので、祈願を込めて寄進したのでしょう。

周辺村々の記録などから、この地域で地引き網による漁業が盛んになったのは、300年ほど前からとされています。市内では旧野栄町域の6か村と吉崎、長谷、東小笹村の9か村にそれぞれ1〜6人の地引き網主がいて組合を作り、取り決めのもと、村の領主からの援助を受けながら漁業を営んでいました。吉崎村では、石橋与右衛門と宇野沢久兵衛2人の名が明治時代まで記録にあります。

大漁の願いは、石灯籠からも伝わってきます。

問 秘書課広報広聴班

☎ 73・0080